

書評：倉石一郎

『包摂と排除の教育学

—戦後日本社会とマイノリティへの視座—

一橋大学 山田 哲也

1. 学校教育の「善意」を問い直す

教育を受けることで身につけたことからは、その人がより良い人生を過ごすうえでなにがしかの役に立つ。仮に直接役に立たない場合でも、教育を受けること自体に意味がある。教育は何かを達成する手段ではなくそれ自体に価値があり、教育を受ける権利は万人に保障されるべきものなのだから。

このような考えに異議を唱えるのは難しい。学校が普及・定着し、教育制度から排除されると他の社会領域でも不利な立場に置かれるリスクが高まる今日ではなおのことそうである。学校教育が整備された社会ほど、教育から排除される帰結が深刻となり、教育による包摂の重要性に疑念を差し挟むことが難しくなる。

とりわけ、マイノリティ研究においてはその傾向が強い。社会的マイノリティはマジョリティと比べると教育へのアクセスが制限され、学業達成の度合いが低くなりがちである。こうしたこと自体がマイノリティの子どもたちに対する差別の現れであるわけだが、かれらを排除する力に抗するために、マイノリティを対象とする研究や実践の現場では、機会の平等の保障や学力格差の是正が重要な課題とされてきた。

マイノリティの人々が置かれた厳しい状況を考えると、こうした課題に優先的に取り組む必要性はよく分かる。だが、社会から排除されてきた人々を教育によって包摂する取り組みには、どこか危うさがつきまとう。

教育から排除されてきた人々を学校に迎え入れる時に、私たちはかれらに対して何をしてしまっているのだろうか。学校教育による包摂によって失われたもの、不可視化されたものはなにか。包摂を試みる現場での教育者と被教育者の出会いは、

学校のあり方にどのような問いを投げかけているのか。

2. 本書の構成と各章の概要

このような課題意識のもとでまとめられた本書は、序章と「〈包摂のフロンティア〉」と題された第1部（1～3章と補章）、「〈包摂の古層〉」を検討した第2部（4～7章）、「終章にかえて」と名づけられた章から構成されている。

序章では、分析の鍵概念となる〈包摂〉の定義が示される。〈包摂〉とは「教育が関心の域外においやっていた存在に『いまさらながら』関心のまなざしを向け、それに対して何らかのはたらきかけを開始すること」（p.9）である。

本書の〈包摂〉概念は、社会科学で用いられる一般的な用法を踏襲しつつ、著者による独自の含意が付加されている。すなわち、①長年にわたり排除されてきた者の包摂と、②包摂を試みる教師たちとの出会いに着目する点に特徴がある。排除と包摂の境界領域で生起するダイナミズムを描くことで、教育が人々をどのように遇してきたのか、その可能性と限界の両面が学校的な学びの特質やそこで働く固有の力学とともに浮かび上がる。そのような見通しのもとで〈包摂〉概念が議論の中心に位置づけられる。

第1部では、在日朝鮮人教育をめぐる言説や実践が検討される。法制度上の基盤を欠くために、在日朝鮮人の〈包摂〉は、「点」の取り組みとして孤立しがちであった。だが熱心な実践者は逆にそれを強みとして、先鋭的・戦闘的な実践を個別に展開する。在日朝鮮人を対象とした教育実践が「〈包摂〉のフロンティア」に位置づけられているのはそのためである。

第1章では、1970年前後の教育実践記録を手が

かりに、大阪市の公立学校に在籍する朝鮮人生徒の「荒れ」の理解をめぐる〈排除〉の語りと〈包摂〉の語りの断絶と連続が検討される。

続く2章では、1980～90年代の在日朝鮮人を対象にした教育実践記録群をもとに、「人間」理念に主導された教育実践が、教育的な価値判断によって「人間的でない」ものとされる他者を排除する諸相が描き出される。

〈包摂〉の成立以前の時期にさかのぼり、3章では50年代半ば～60年代初頭の大阪市における公立学校の取り組みにスポットをあて、学校の日常を問い直し公共性を追求する姿勢から、実際に展開したものは異なる〈包摂〉の可能性が導き出される。

第1部を締めくくる補章では、在日朝鮮人教育研究の先駆者である小沢有作のテキストから今日的な含意を読み解くことが試みられた。

第2部では、高知県の「福祉教員」が被差別部落出身の子どもたちを学校教育につなぎとめようとする取り組みを手がかりに、〈包摂〉の古層が検討される。福祉教員が活躍した1950年代の高知県地方の被差別部落には学歴社会を自明視する主流の文化・価値秩序とは異なる固有の社会文化世界が保持されており、そのことが学校からの離脱の背景にあった。福祉教員が学校の内外で行った活動やそこでの出会いは、〈包摂〉の担い手である教員を深く揺さぶり、そのあり方を問う契機に満ちていた。50年代の高知を倉石氏は〈包摂〉の古層と捉え、今日の〈包摂〉とは異なる筋道が探求される。

第4章では、福祉教員制度の導入とその活動の展開を押さえながら、学校と外部世界の境界線にたつゲートキーパーとしての福祉教員が開放性と閉鎖性の両面を有していたことが明らかにされた。

この点を踏まえつつ、第5章では、高知市内の福祉教員たちの教育実践が検討される。1950年代に戦後の義務教育制度が社会に定着し、学校に対抗するオルタナティブな価値を提供する固有の社会文化的世界が姿を消すなかで、家庭と学校の「生活」の位置づけが変化したことが確認された。

これまでの章とはやや位置づけを異にするのが第6章である。この章では福祉教員の先駆者、福岡弘幸氏のインタビュー記録が検討されるが、調

査時のやりとりを丹念に読みほく作業を通じて、「紙の世界」に書き留められた実践記録からこぼれ落ちたことがらが浮かび上がる。

第7章では、日教組の全国教研集会に関する資料が検討される。そこで明らかになったことは、戦後初期の教育界においては「特殊」という用語が多様な問題領域を指し示すものとして使用され、多種多様な教育問題が越境する言説空間で同和教育実践が論じられていたことである。戦後初期に展開した諸言説の混成性が失われることで同和教育をめぐる語りがどのように変化したのかが検討された。

「終章にかえて」では、筆者自身が語り手として登場する。研究のプロセスを回顧しつつ、本書をつらぬく問題意識と方法論が確認される。

3. 本書の意義と探求すべき課題

本書の意義は第一に、学校による社会的包摂がもつ危うさを鮮やかに描き出した点にある。

実践記録の批評を通じて明らかにされたように、教育的な営みが有するパターンリズムが学校的な価値判断と結びつくと、包摂の対象となる人々やその内面を人間(的)／非人間(的)なものとして区分し、前者に教育可能性を見出だすとともに後者を他者化する力が作動する。

教師たちによる包摂の取り組みを記録し、これらをもとに討議を重ねてより良い教育実践を模索する活動にも留意すべき点がある。こうした営みを通じて形成されるモデル・ストーリーは、教師たちに展望を与え、かれらの実践を支えるが、他方で先鋭的な実践のラディカルさを無害化し、これまでと変わらない学校の日常に回収してゆく機能を有している。実践の語りが定型化し、多様な問題に開かれていた言説空間が雑種性を失うことで、マイノリティ教育実践が持つ豊かな可能性が切り詰められてゆく様相が本書では説得的に描かれていた。

本書は〈包摂〉を鍵概念に、在日朝鮮人・被差別部落出身者をめぐる問題の個性性に目配りしつつ、長年にわたって差別され、教育から排除されてきた人々を対象とする実践が共通に抱える問題点・課題を指摘している。そこにはマイノリティ

教育のあり方に再考を迫るだけではなく、学校の日常を支える制度や教育実践そのものを懐疑し、「学校化」した社会の息苦しさの背後にあるメカニズムに迫る射程の広さがあり、そのことも本書の魅力の源泉である。

第二の意義は、包摂の危うさを指摘しつつも、排除されてきた人々を包摂する試みには常に他者との出会いが付随し、それが学校や教師が自らの姿勢を問い直す契機になっていることを具体的な事例から読み解いた点にある。包摂の試みは他者化に帰着するだけではない。学校的な価値観から距離をとってきた人々との出会いには教育を解毒する力がある。マイノリティ教育実践の危うさを指摘しつつ、同時にその可能性を救出する作業が本書ではなされており、そこに筆者の優れたバランス感覚がある。

本書の到達点を確認したうえで、今後探求すべき課題について触れておきたい。

第一に、教育実践のポテンシャルを規定する要因のさらなる解明を期待したい。本書ではテキストの丹念な批評を通じて、マイノリティ教育実践の危うさと可能性の両面が示されていたが、ここではテキストを多様な読みに開くことが優先される一方で、様々な解釈が結局のところどのような像を結ぶのが判然としない点がある。例えば、本書の検討を通じて導き出された知見を相互に関連づけながら、教育実践の可能性を引き出すためには何が必要なのか、あるいは逆に、教育による包摂の危うさを緩和する条件について論じることができるし、そうした作業が必要なのではないだろうか。

なお、本書の序章ではジョック・ヤングに言及しつつ、かれが描き出した社会変動とは異なる展開を日本社会が経験した可能性が示唆されていた。各章の検討結果を踏まえ、日本的な包摂／排除のメカニズムをひとつの社会像として提示することも可能であろう。

もちろん、著者がこのような大きな図柄の提示をあえて禁欲していることは、学校教育を支える「常識の批判・解体の実践を行うのはこの作品の著者ではなく、登場人物」(p.334)と終章で述べていることから明らかである。

しかしながら、社会のセーフティーネットがほ

ころびを見せている今日においては、現状を精確に把握しつつ、教育による包摂の危うさを最小化し、マイノリティ教育実践のポテンシャルを十全に引き出すための条件を模索する作業が理論的・実践的に要請されている。

学校の常識を問い直し、〈包摂〉が何を他者として排除しているのかを明らかにする課題の重要性に同意しつつも、「子どもの貧困」問題として端的に表れている今日の苛烈な排除に抗するため、教育実践にできること・できないことを腑分けし、その積極的な側面を引き出す条件を探る作業が求められているのではないか。

第二に、教育実践を検討する際の方法にみられる「ゆらぎ」をどのように位置づけるのかが問われている。6章では、教育実践を記録したテキストの歪みを批評し「紙の世界の向こうを張ろうとする声」に耳が傾けられていた。他の章とは異なるこのアプローチを全面的に展開すると、「紙の世界」に属する教育実践のテキストを読み解みとく本書のアプローチの妥当性がゆらいでしまう。

6章の末尾では、〈声〉との出会いを媒介するのは結局のところ「紙の世界」だという逆説が指摘され、限界を踏まえつつも「紙の世界」に依拠したテキストクリティークを議論の基盤にせざるを得ないという認識が示されている。この地点にとどまるのではなく、テキストとそれに対抗する声のダイナミズムを自らの分析に活かす方法論を明示する必要がある。この作業は第一の課題に応答するためにも不可欠だろう。

(本書は生活書院から2009年に刊行された)